Dale Pastoral Center

DPC ニュースレター

2022 年 6 月 1 日　第 8 号

巻頭言　始まりを覚えて

DPC 所長　齋藤　衛

本年 2022 年は PGC（Personal Growth and Counseling Center 人間成長とカウンセリング研究所）が創設されて四十年にあたる年です。すでに PGC は十年前にその活動を閉じていますが、しかしその働きを受け継いだ DPC（Dale Pastoral Center デール・パストラル・センター）にとりましては、たいへん意義深い年と言わなければなりません。PGC 創設の志に立ち帰り、また PGC から DPC へと移行したその意味をもう一度大切に捉えるためにも、振り返るこの機会を生かしたいと考えております。そこで今号と次号のニュースレターでは、PGC、DPC に携わってこられた方々にご執筆願うことといたしました。今号は賀来周一先生とジェームス・サック先生にお書きいただいています。

PGC 創設は 1982 年でした。カウンセリングという言葉もあまり馴染みのない時代であったかと思います。その時代に先駆けて「全人的理解に基づく人間成長を目指して」PGC は設立されました。立ち上げ後、所長のデール先生は盛んに各教会を回り新しい活動について話されたのでしょう。私が信徒時代を過ごした近郊の小さな教会にも先生はいらっしゃいました。教会でも何やら新しい研究所ができたそうだから話を聞いてみようじゃないか、という期待があったことを覚えています。

初めてお会いしたデール先生は、歩く誠実さであり、また歩く包容力であると感じました。こんな方の生きておられる世界があるのだなあと、私はいっぺんで魅了されました。賀来先生の今号の文章をお読みするなら、PGC 立ち上げについては必ずしも順風ばかりではなかったことを知ります。であるなら、あのときのデール先生の中にも静かな闘いと、それを通してますます与えられる確信とがあったのかと思われるのです。

それ以後、デール先生はお会いするたびに「齋藤さん、私と初めて会った時のこと覚えてますか？」といつもお尋ねになります。いつもです。「もちろんです。立川教会に来てくださったときのこと、はっきり覚えています」とこれまたいつも私はお答えします。このやりとりを何回したでしょう。私は覚えていますよという先生からのメッセージだと私は喜び、つながりの始まりを思い起こす幸いを感じる機会となっています。

始まりに立ち帰ることは恵みです。読者の皆さまお一人おひとりと PGC、DPC とのそれぞれの始まりを思い起こしていただけるなら、まことに喜びです。そこにある神さまの計らいを知り、共に感謝したいのです。

PGC 発足 40 年そして閉所 10 年の今年、本号および次号にて PGC と DPC に関わりを持つ方々の証言をいただきます。まず本号では DPC 顧問である賀来周一先生（日本福音ルーテル教会引退牧師）と DPC 所員ジェームス・サック先生（ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校教授）から PGC から DPC への移行を俯瞰する視点で寄稿していただきました。

PGC から DPC へ

賀来　周一

1．発足時の PGC

デール先生から「手伝ってくれませんか」と誘われて PGC の働きに参加するようになったのが 1982 年。当時、私は日本福音ルーテル教会総会議長の職責を離れたばかりの時であった。爾来、教会の現実を益々深いところで見ることとなった。教会の牧会現場は、さまざまな問題を抱え込む。そうした問題に援助する機関が必要とされた。それに応えて PGC が設立されたのである。PGC は 2012 年をもって幕を閉じることとなったが、その間 30 年。教会に果たした功績は大きいと言わなければならない。

1982 年の発足にあたり発起人を集めようという話になり、ルーテル市ヶ谷センターの会議室に、牧会者だけでなく当時よく知られた専門家も招くことにした。有益な意見や知恵を頂戴しようという試みであったが、案に相違して、設立賛成意見より反対意見が多く持ち出された。牧師は人間の問題を扱うに聖書と祈りをもって接するのが本筋ではないかとか、あるいは牧師が心理の世界に足を突っ込むのはどうかなどと遠慮のない意見も出された。発起人会から有益な意見を貰うつもりが、逆に冷や水を浴びせられたようなもので、少々困ったが、デール先生は動じることなく思い切って一歩を踏み出すことにした。名称については、心理的問題だけを取り扱うのでなく、人間の成長を目指すという意味をこめて、「人間成長とカウンセリング研究所」と名付けたのである。

2．信徒のニーズ

募集が開始されると申し込みが殺到した。午前のクラスはルーテル市ヶ谷センターの会議室で行われたが席は常に一杯になり、日本ルーテル神学大学（現在はルーテル学院大学）で行われる夜のクラスも常に満席であった。その多くを占めたのは教会の役員クラスの人たちであった。受講の理由を聞いてみると教会ではさまざまな問題が渦巻いていることが分かった。

本来、教会というところは誰でも自由に出入り可能な場である。好奇心から来る人があり、通りすがりに賛美歌の歌声が聞こえたので覗いてみたという人もいる。個人的な問題に答えを求めて教会に来る人もある。しかも上下関係があるわけでもない。それだけに人と人が交わるときには、事柄よりも気持ちの方が動く。そのあたりから発生する問題や人間関係が、教会に困り事をもたらす。責任をもって教会を運営するためにはそうした障害を処理しなければならない。牧師はもちろん、役員も通常の事務、財務などの処理の他、気持ちの行き違いから起こる葛藤を処理する役目も果たすことが求められる。そのために PGC のカウンセリング知識と実習に大きな期待がかかったのである。

3．臨床牧会教育を学ぶ

PGC の出発段階にあたって、スタッフの研修プログラムを組むこととなった。私は若い頃、オハイオ州スプリングフィールドにあるウィッテンバーグ大学のキャンパスの一角にある Hamma Divinity School に留学していた。しかし、当時は専攻領域が異なり、牧会カウンセリングの領域はまったくの素人である。

デール先生から「それではもう一度留学してください」と声がかかり、カリフォルニア州バークレーにある GTU の講座にある臨床牧会教育（CPE=Clinical Pastoral Education）を受講することにした。GTU とは、Graduate Theological Union の略称でカリフォルニア州立大学バークレー校の大学院を中心に九つの教派別神学校が参加してできた共同体のことであり、どの神学校でも単位を修得できる仕組みになっていた。

今後の DPC の活動において、牧会者のための CPE（臨床牧会教育）が必須となると思われるので、私が経験した CPE のプログラムを参考までに報告しておきたい。

私が CPE を体験したのは Herrick Memorial Hospital で行われている CPE である。その病院では CPE の受講生をチャプレン待遇で受け入れていた。CPE を実施する場は病院ばかりではない。福祉施設で行われることもある。一般に病院を実習の場とするのは、通院患者も入院患者も不安や悲嘆、恐れなど感情の動きが安定していないからである。いろいろな負の感情を抱えた人々に平穏な心情を持てるように援助する場として病院が適所だからである。

一例として、バークレーで経験した CPE のプログラムを紹介しておこう。毎日 8 時には病院の医務室に顔を出し、看護師からその日訪問する患者を指定された。その患者の病名や体調をカルテで知って病室の訪問をすることになっていた。看護師はその際のルールを手厳しく指導した。患者の枕元に水が置いてあっても飲ませてはいけない。それは看護師の仕事だと言う。患者が自宅に郵便物が来ているかも知れないから取って来てくれないかと言ったとしても親切心から取りに行ってはならない。ソーシャルワーカーにまかせなさいなど、細かいルールを教えてくれた。看護師は、あなたの仕事は患者と向き合い、当事者との間に信頼関係を作ることだから、チャプレンは難しい仕事なのだと言う。

病床訪問をした後、患者と交わした逐語録を作成する仕事があり、それには患者との間にどのような感情が動いたかも添え書きしなければならなかった。この作業は困難であったが、心理的に援助をする場合には重要な意味を持っていた。CPE を受けるメンバーは七人でそれぞれにちがう教派に所属していた。カトリックのシスターもいたし、ユニテリアンもいた。それらのメンバーの内、一人ないし二人のメンバーが患者との逐語録を他のメンバーに配り、全員で評価をした。これは CPE の基本的プログラムと言ってよいであろう。時にはメンバーが主催して、病院内の医師や看護師に発題して貰い、シンポジウムを開催することもあった。

また、ホットチェアと称して一人のメンバーをグループで囲み、徹底して本人の弱点を暴くという時間もあった。がっかりして気を落とす者もいれば、平気な顔をしている者もいた。自分自身の短所への気付きを得るには、少々手荒いと言えるがよいプログラムであった。

4．PGC から DPC への切り替え

PGC は 30 年の歴史を閉じたが、それは次の新しいステップへ進むためであった。その切り替え時期の苦労を負ったのがサック先生である。PGC が主として信徒層に焦点を絞りカウンセリング理論や技法、そして体験学習を重視したのに対し、DPC は牧会者が現場で抱え込む問題を取り上げることとなった。

牧会の現場は一筋縄では行かない世界である。そこで DPC は教派を超えた牧師のための研究会を開設した。ただ単に講義を聞くのでなく、互いに抱えた問題を共有して討議を重ね、そこから何らかの洞察を得て現場に活かすことを目的とした。

人は危機的実存的な場に臨んだときにはさまざまな問いを持つ。死に面した時は特にもそう

である。「私はなぜ死ぬのか？」、「死ぬに死ねない」、「生きていても仕方がない」、「この私は死んだらどうなるのか」などである。これらの問いはスピリチュアル・ペインと言われる。加えて難治性致死性の患者、予期しない出来事に遭遇した者などの問いがそうである。牧師は、このような問いにしばしば出会うことがある。

WHO（世界保健機関）は、こうしたスピリチュアル・ペインに対応しなければならないとし、身体的、心理的、社会的要因を重視すると共にスピリチュアルな要因を援助の目的の中に入れるように主張している。スピリチュアルな要因とは健全で成熟した宗教性を意味する。DPC は幸いにして、健全で成熟した宗教性を土台として設立されている。これを手立てにスピリチュアル・ペインの問題に DPC としての貢献ができると期待している。

エッサイの根

ジェームス・サック

エッサイの株を思い起こす

たいへん光栄にも、私は、PGC の遺産を思い出して語ること、そして、PGC と新しく設立された DPC とを比較すること、という役割をいただきました。

この比較を始めるにあたり、聖書のイザヤ書にある比喩を取り上げたいと思います。「エッサイの根」とは、イザヤ書 11 章 1～10 節にある喩えです。「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで　その根からひとつの若枝が育ち　その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊　思慮と勇気の霊　主を知り、畏れ敬う霊」ということです。エッサイはダビデ王の父であり、イエスはエッサイとその子ダビデの系統の子孫でした。もちろん、PGC と DPC の話と、メシア、つまり私たちの主イエスの話とは違います。しかし、PGC から DPC への移行を語るとき、切り株と新芽のイメージは適切なのではないかと思います。

PGC の歴史を振り返る

PGC は 1982 年に始まり、2012 年に閉じるまで 30 年の歴史がありました。ケネス・デール先生が PGC の創設者であり、最初の所長でした。1995 年に引退して帰国するまでこの研究所を育ててくださいました。PGC のビジョンを示し、素晴らしいリーダーシップでさまざまな人に多くの役立つものを提供する機関を作り上げてくださいました。デール所長と PGC は、当初から JLC（ルーテル学院大学）、特に清重尚弘学長と中山格三郎事務局長の両名から大きな支持をいただきました。そしてその 30 年の歴史を通じて、JLC の学長達（清重氏、市川一宏氏）、事務局長、そして学校の教職員が、PGC をしっかりと支えてくださいました。PGC の運営と機能において重要な役割を担っている数多くの人物をすべて挙げることはできません。

1984 年からは、賀来周一先生と深澤諄子オフィス・マネージャーが、デール先生と共に研究所の発展・運営に大きな責任を負ってくださいました。私は、1992 年から 2012 年まで 20 年間所員の一員として働き、そのうち 1996 年から 2012 年までの 16 年間は所長としての務めをいたしました。2000 年から 2002 年までの 2 年間は、私がアメリカに帰国、留学していたため、白井幸子先生が所長代理を務めてくださいました。 2013 年に深澤諄子氏が編集委員長を務めて発行した PGC の『30 年のあゆみ』には、非常に完全で詳細な活動報告が掲載されています。

PGC から DPC へ　両者の働きを考える

DPC の始まりにあたって、私は新しい研究機

関の立ち上げを議論する委員会に参加する機会を得ることができました。PGC は JLC に付属する研究所でしたが、DPC は神学校に所属し、その下で機能しています。この委員会は「PGC 後の新機関・働きの構想・検討委員会」と呼ばれ、PGC の閉所後すぐに会議を開始しました。最初の会議は 2013 年度の初めに開催されました。DPC の正式発足は 2014 年 4 月 1 日でした。私は両機関と密接に仕事をしてきたので、その共通点と相違点について考えてみたいと思います。

私にとって最も重要な共通点は、PGC も DPC もキリスト教の人間理解にしっかりと基づいていることです。PGC も DPC も、プログラムに参加するすべての人に神の愛と恵みを伝えることを目的に存在しています。PGC の規約にはこう書いてあります。「第 3 条（目的）本研究所は、カウンセリング・サービス、教育訓練および研究と出版を通して、教会と社会に貢献することを目的とする。」それに対して、DPC には「本センターは、ルーテル教会およびエキュメニカルな交わりにある諸教会をちからづけ、牧師の牧会力を高め、信徒の霊性を養うことを目的とする。」という使命があります。

もちろん、PGC、DPC ともに提供されるプログラムに興味があれば誰でも参加できます。行われていることはすべてキリスト教の信仰に基づいており、両機関とも人間を祝福してくださる神の持つ多くのものを分かち合いたいと考えているのです。これは、日本社会全体、教会、そして特に提供される教育的なプログラムに参加する人たちへの大きな貢献だと考えています。

PGC は、教育、相談業務、研究の 3 つの柱を軸に、非常に充実した体制を整えていました。教育の柱では、次のようなプログラムが提供されていました。カウンセリング基礎コース、カウンセラー訓練養成コース、カウンセラートレーニングコース（CTC I・II）、カウンセリング継続教育講座、CTC 継続教育、認定コース、サイコドラマ研究会、TA（交流分析）研究会、家族研究会、箱庭研究会、SST（生活技能訓練）、そして公開講座も開かれていました。

3 つの柱のうちカウンセリング分野には面接カウンセリングとグリーフサポートグループがありました。そして、研究分野では出版、グリーフ研究会、性教育チームとパストラルケア研究会が行われました。

PGC の場合、教育プログラムのほとんどは、PGC のスタッフや外部からの非常勤講師が担当しました。同時に、多くのボランティア（彼らは PGC で教育や訓練を受けた人たち）が、基礎コースの手伝いに力を発揮しました。受講修了後、これらのボランティアは、様々なところで集う少人数グループのファシリテーターやオブザーバーとして手伝いました。ボランティアたちはそこでの受講者たちの書く会話記録からもさらに学んだのです。

私にとって PGC での最もうれしい点は大勢の手伝ってくれる人と接することでした。彼らはプロではありませんが、ファシリテーターになる前に、何年も勉強し、セッションを観察してきました。このボランティアとのコミュニティは大きな家族のようで、一緒に働き、そして交わりを感じられました。私は PGC を表現する言葉として、「手作り」という言葉を思いつきました。料理と同じように、食事（教育）の準備と提供は、教育を受けるメンバーに対して細心の注意を払いながら行われます。教育の品質だけでなく、愛情を込めて作られたものでした。

PGC の 30 年の歴史の中で、所員だけがカウンセリングを行うのではなく、18 名の認定カウンセラーが選ばれ、所員と共にカウンセリング

を行うようになりました。このカウンセラーたちは、長い年月をかけて勉強し、ボランティアとして教育プログラムの手伝いをしてきました。その後、試験と面接を受け認定されたのです。カウンセリングのほかにも、毎月、継続教育やケースカンファレンスが行われました。

PGC の研究の分野では、長年にわたって多くの論文が発表されました。その中のひとつに「グリーフサポートグループ」によるものがあります。このような研究を行うための準備は 1991 年から始めていました。1997 年には大学と共にアメリカオレゴン州にあるダギーセンター（喪失体験を抱える子どもと家族の支援をする施設）で活動していたシンシア・ホワイト氏を日本に招き、ワークショップをしていただきました。その後すぐ、大人のためのグリーフサポートが始まり、1998 年には子どものためのグリーフサポートも始まりました。

PGC が遺したもの、伝えるもの

2012 年に PGC が閉じられたとき、私は研究所のイメージとしてオアシスのようなものを思い浮かべていました。ご存知のようにオアシスは、砂漠の中の肥沃で安全と聖域を提供する場所です。PGC は多くの人々の生活の中で同じような役割になったのではないかと考えていたからです。クライエントにとって、PGC は自分の問題点や困難を持って来てカウンセラーにケアをしてもらうオアシスでした。解決を見つけることだけではなく、自分が尊厳や自尊心や価値を持っている人間だと気づかされました。カウンセリング・ルームは、クライアントのための聖なる場所だったのです。

人生という砂漠の中で、人は時に休息と安心と要塞を必要とします。PGC はそれを多くの人に提供したのだと思います。PGC の閉鎖は残念なことではありましたが、多くの事情や状況が一度に重なったために起こったことでした。正直言って、私にとっても、デール先生をはじめとする多くの人にとっても、かなり悲しい出来事であったと思います。しかし同時に、PGC が３０年間、そこで働く人々やボランティア、そして勉強やカウンセリングを受けに来る参加者に、どれだけ素晴らしい影響を与えていたかということにも感銘を受けました。研究所が閉鎖されても、PGC が持っていた影響力は、多くの人々、そして教会や社会全体に受け継がれているのです。それは、大切な人が亡くなったときのことを思い起こさせます。その人はもうこの世にいないけれども、その人の人生によって養われた人々の心の中に、その人の香りや影響が続いています。どんな人にも始まりと終わりがあるように、PGC にも、また始まりと終わりがありました。PGC と関わったことで、多くの人の人生には変化があり、また成長したのです。その思い出、貴重な教え、そしてカウンセリングの援助は、PGC の教育、臨床、研究を受けた人たちの心の中に残っていると、私は心から信じています。

ひとつの芽が萌えいでる

このことから、私はエッサイの根に思いを戻すのです。PGC の扉が閉じられたとき、それはまるで木が切り倒されて切り株だけが残っているように感じました。しかし、わずかな空白を経てその切り株から新しい芽が生まれ、PGC という根から枝が伸びたのです。その若々しく活気ある枝が DPC なのです。PGC と同じものではない、しかしその目的と働きにおいて同じ DNA を持つものです。DPC は PGC よりも規模はずっと小さいのですが、ここでもまたこれまでに確立された 3 つの柱を通してじゅうぶんな修養と大切なものを世に分かつのです。

切り株から新しい枝が出れば、もちろん同じ種類の木が育ちます。しかし、それは同じ木で

はありません。同じ土台から生まれたのに、別個の存在になるのです。これは DPC も同じです。DPC の目的は、PGC と同様、教会と社会全体の両方に奉仕することです。これは、PGC と DPC が共にキリスト教的な人間理解に基づくものであることに起因しています。DPC は PGC の歴史的遺産を引き継ぎ、出発しました。このようにして、PGC の精神とモチベーションは、別の形で生き続けているのです。

先ほど、PGC は非常に多くの参加者やボランティアが手伝ってくれる大家族のようなものだと申し上げました。DPC は、研究機関としてより伝統的な構造をとっています。ほとんどのプログラムは、外部のボランティアの力を借りずに、スタッフによって提供されています。最初の 6 年間は、石居基夫先生が DPC の初代所長を務めました。その後、2020 年から齋藤衛先生がその任を引き継ぎました。お二人とも素晴らしいリーダーシップを発揮されています。

DPC には 3 つの領域があります。パストラルの領域では、教会と牧師の牧会力を高めるための研究とプログラムを展開しました。DPC の大きな目的の一つは、教会の中で牧師が働き、教会の周りの人々に対してより効果的な働きかけが出来るように支援することです。これは、ドイツ語で "seelsorge" という言葉で「魂の配慮 」を意味する表現です。PGC が閉じられた後、この大切な柱の遺産を引き継ぎ、聖職者のための「牧会研究会」を始めました。その目的は、現代の教会が直面している様々な問題を取り上げて牧師先生たちと一緒に話し合うことです。例えば、人間関係の問題、精神障害、人生の終わり（死にゆくことやグリーフ・ケア）、ジェンダーの問題等についてです。

スピリチュアルの領域では、教会と現代社会におけるスピリチュアリティ（霊性）の研究と、教会・信徒の霊的成長のためのプログラムを始めました。ここではクリスチャン・スピリチュアリティの歴史を学んで、このテーマを掘り下げます。この勉強を通して、現代の教会にどのように貢献できるかを考えます。今までこの研究会では次のようなテーマを学びました。「カルメル会」、「ルターの霊性思想」、「ドミニコ会」、「レクチオ・ディビナ（聖なる読書）」、「聖書と黙想」、「テゼ共同体」など。

ソーシャルの領域では、大切な人をなくした家族へのグリーフ・ケアの働きを担いつつ、その研究と支援者の養成をしています。この領域も PGC から少し違う形で続けるプログラムになりました。「だいじな人をなくした子どもの集まり」は、親や兄弟姉妹、その他の身近な人をなくした子どものための活動です。小学生・中学生を対象に、２カ月に１回開催します。遊びを通して子どもが思いを表せる環境と人間関係を作ります。この環境は安全で安心できる空間です。子どもの表現と遊びを通して、「いたみ」を分かち合うことは援助になります。

ひとつの若枝が育ちその上に主の霊がとどまる

PGC そして DPC とのつながりを経験し、私は神様が役目を終えたものから新しい命を招いてくださることを具体的に知ることが出来ました。このように両者で働くことができたのは、本当に光栄なことでした。DPC のこれからの働きに大いに期待しています。

冒頭でイザヤ書 11 章 1～10 節を引用しました。神様がエッサイにされたように、「DPC の上に主の霊がとどまる」と私は心から信じています。 DPC を通して神様がたくさんの方を祝福するように祈ります。

この一冊

今回は日本福音ルーテル八王子教会坂本千歳牧師よりご紹介いただきました。

『ミュージックサナトロジー　やわらかなスピリチュアル・ケア』

里村生英著　　春秋社　2021 年

著者の里村氏は、広島大学で教員としてのキャリアを手放し、2001 年に渡米された際、エンドオブライフケアの一様式「ミュージック・サナトロジー」と出会われ、帰国後 20 年余りにわたって日本におけるミュージック・サナトロジーの応用実践・研究を続けてこられました。

本書はこの分野では初めての日本人の手による研究書であり、ミュージック・サナトロジーの創設者であるテレーズ・シュローダー・シーカー（カトリックの女性）の語りがふんだんに引用されているのも魅力です。序章・第一部では、なぜシュローダー・シーカーがミュージック・サナトロジーを生み出すことになったのかという、彼女自身と、患者や家族を取り巻く当時の社会・医療の必然性が、そして第二部では、音楽を使ったケア・看取りのインスピレーションを、11 世紀のフランスのクリュニー修道院という信仰・生活の共同体の実践（看取りの習わし・儀式）から得たこと等が紹介されています。

里村氏が「この本の勘所」とおっしゃるのが第三部。ここでは音楽による臨床実践を支える柱として、“観想的修練”が必須と述べられています。それは、「ケアする人が普段の生き方において、自らの深み・内面に触れ、省察する修練であり、ケアする人のからだとこころ（身体的、感情的、知的、精神的側面すべて）が全人的に統合された状態を培う」ためのもの、私たちが「習慣的に無自覚に身につけてしまった生き方・考え方を剝ぎ取っていく」ものと言われます。その取り組みの中で鍛錬される深い注意のはたらきと自らのありようの刷新が、そのまま音・響きを通してケアに反映される、というのです。

私自身、「リラ・プレカリア」をとおしてハープによる寄り添い・看取りのケアの働きに召されて 4 年余りが経ちます。目の前の患者さんが、この世における様々な執着やアイデンティティを手放し、限りなく純粋な存在として新たな次元のいのちに生まれ出ようとしている場面に居合わせるとき、自分自身の在り方が恐ろしいほどに問われる経験をします。どのような奉仕の業も、何らかのインナーワークの取り組みなしには、相互の存在の深みからの関りは生まれないのではないかと考えていた私にとっては、核心を衝く内容でした。この本がスピリチュアルケアに携わっておられるあらゆる奉仕職への示唆とインスピレーションの源になると確信しています。

- **「詩編と祈り～音楽のスピリチュアリティとともに～」再開講のお知らせ**
  もう一度開講を、との多くの皆様のご希望にお応えし、今秋よりオンラインにての開講を準備しています。詳細は 8 月初めにホームページにてご案内申し上げます。
- **ケネス・デール先生近著「Where in the World is God?」日本語版出版のお知らせ**
  本誌第 5 号でご紹介しました同書の日本語版が今年中にも出版される運びとなりました。どうぞご期待ください。

☆編集後記☆

「オアシスのような場所であった PGC」という本文中の言葉に胸を突かれました。若枝の DPC も発足して 9 年目となります。どのような場所であり存在であるのか。今一度立ち止まり考える時を与えられ感謝いたします。

発行：日本ルーテル神学校 附属研究所　デール･パストラル･センター　　発行人：齋藤　衛
181-0015　東京都三鷹市大沢 3-10-20　TEL:0422-26-4580（直通）　E-mail: dpc@luther.ac.jp　http://www.luther.ac.jp/